

# 自然とともに生きるマタギに憧れ、秋田へ。 マタギを通じて得た経験を活かした事業を展開



クマの革製品事業を通じて広めたい

マタギ修行を通じて学んだ教えを

いただいた命を生かしたい

香川県出身の山田健太郎さんが代表を務める合同会社HUNT。大学3年生のころ、東北を旅しているときに初めてマタギの存在を知り、マタギが営む「松橋旅館」を訪れた山田さんは「いつかマタギをやってみたい」と考えるようになった。北秋田市の地域おこし協力隊となり、マタギ修行を経験。2年間の修行で学んだことを仕事にしたいと令和4年4月に起業した。現在の事業や今後についてお話を伺った。



合同会社 HUNT  
代表 山田 健太郎

〒018-4742  
北秋田市阿仁幸屋渡字沢越23-2  
TEL: 080-9758-6616  
mail: huntllc.2023@gmail.com

## 自然とともに生きる姿勢 マタギの考え方に憧れ

山田さんが大学卒業後の進路にマタギを選ぶ決意をし、北秋田市阿仁を再訪したのは令和元年の11月のことだった。高校時代から東北へ興味を持ち、大学時代には何度か東北巡りをしていたという山田さん。幼少期、自然が身近ではなかったからこそ、憧れの気持ちがあつたと振り返る。そんな山田さんには、マタギの生き方や考え方、物事の捉え方が新鮮で、魅力的に映った。

「先手を打って狩猟免許を取得し、身体を鍛えて弟子入り志願をしましたが、人を雇う余裕はないと断られてしまいました。でも、北秋田市の地域おこし協力隊のことを教えてもらい、市役所の方を紹介してもらいました」。



①

それがきっかけで、令和2年から北秋田市で地域おこし協力隊として2年間のマタギ修行を経験。新型コロナウイルス感染症による未曾有のパンデミックに突入する直前だった。

## 山の恩恵に感謝して 誇りを持って生きる姿

山田さんは地域おこし協力隊としてマタギの修行を重ねながら山を学んだ。

「松橋旅館の師匠・松橋利彦さんとは親しくさせていただき、その中で狩猟だけでなく、山菜のことも知ることができました。地域おこし協力隊として『道の駅あに』に出店している方から山菜を仕入れて販売したことがあります。その時、実は地元の人はそんなにお金を稼ぎたいと思っていないことに気づきました。山菜を採って、大量に捌くというよりはそれを喜んで食べてくれる人がいればいい。お金よりも暮らしに誇りを持っていて、自然とともに生きることが幸せなんだなと」。

地元の人が山の恩恵を受けて生きている姿勢とマタギの「いただいた命を最後まで生かす」精神を学んだことで、やむなく捨てられてしまうクマの皮に光を当てたいと考えるようになる。令和4年4月に起業した山田さんは、



解体の際にできる刃物の痕などもあえて残し、製品を通じてマタギの考え方などに触れて欲しいと考えている。



県内外で展示会を開催。見るだけでなく、製品や皮を実際に触れることができる。



山田さんは修行中、集団で行う「春熊狩」と単独で行う「秋熊狩」の2種類を経験した。

①触れることでクマが毛皮を纏って生きていたことをまざまざと感じられる。

②山田さん自身も自宅兼工房にて革製品の制作を行う。



②

阿仁での暮らしで得たさまざまな学びを活かし、クマの革製品を展開する「ITAZ LEATHER」事業をスタートした。

## 展示会での販売を通じて 多くの人に広めていきたい

「ITAZ」(イタズ)とはマタギの言葉で「クマ」を表す。クマの解体では肉は食用として分け合うが、皮は廃棄されていた。山田さんはそれを加工し、革製品として販売することを考えた。当初は自分でも加工を手掛けていたが、県内で革製品の製造を行う作家と繋がり、現在は製造を委託している。クマの駆除件数が多かった令和5年には、狩猟者から90頭分の皮を譲り受けることができた。

主に展示会で販売を行っているが、直接製品の説明をしながら販売することで、多くの人々がクマ駆除に対するさまざまな思いを抱いていることに気づいた。

「クマが自分たちの生活圏に近づいていることに恐怖を感じ、駆除して欲しいと思うのは当たり前です。でも駆除に少なからず心を痛めている人も多いことがわかりました。狩りでいただいた命を最後まで生かそうとするマタギの思いを、事業を通じて多くの人に知ってもらいたいと思います」。

撮影：山口Finito裕朗